

「災害と社会貢献～その時に備えるために～」を開催

いつ起きるかわからない大災害。それに備え、被害を最小限に食い止めるための備え方や復興支援のあり方について考える社会貢献フォーラム「災害と社会貢献～その時に備えるために～」が2009年1月31日に、横浜市港北区の慶應義塾大学 日吉キャンパスで開催された。このフォーラムは全日本社会貢献団体機構（AJOSC）、神奈川新聞社、全国地方新聞社連合会の主催で、約400名が参加した。フォーラムは2部制で行われ、第1部では気象予報士の村山貢司さんが『気象災害と防災への心がまえ』をテーマに講演し、第2部では具体的な活動事例について、さまざまなジャンルで活躍されている5人のパネリストが、活発に意見交換を行った。

第1部 講演

同時多発的な「ゲリラ豪雨」が発生。



第1部の講演のテーマは『気象災害と防災への心がまえ』である。講演した気象予報士の村山貢司さんは、(財)気象業務支援センター 専任主任技師で、NHKなどでウェザーキャスターとして出演していたのでご存じの方も多だろう。

講演はまず村山さんの専門である気象災害の話題から始まった。

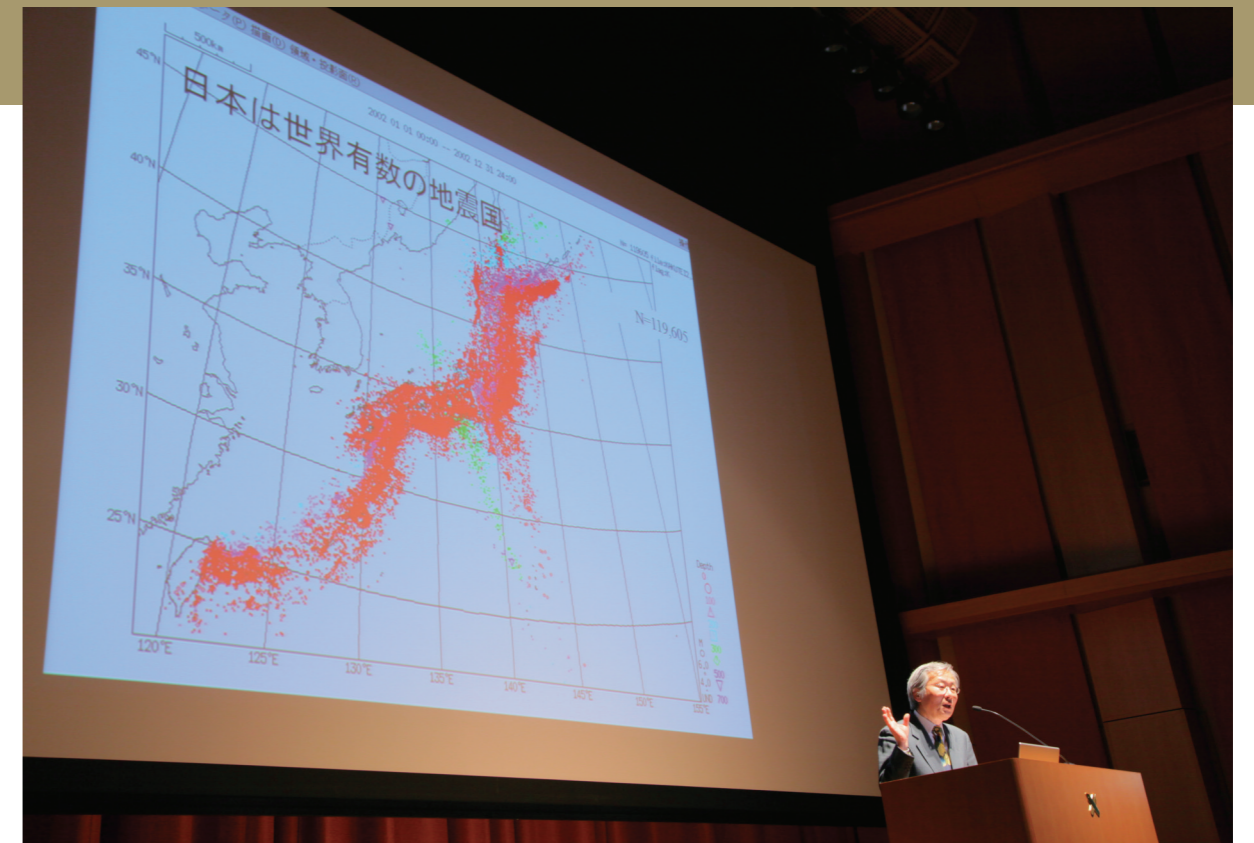
「1954年から2007年までのデータを見ると、日本列島全体の降雨量はほとんど変わっていません。ところがその

中身は大きく変化しています」という。降るときは大雨になり、降らないときはまったく降らないのだそうだ。特に1時間で50ミリを越えるような大雨は1977年からの10年間では1995回、年間で200回弱であったのに対して、1997年からの10年間では3084回、年間で約300回と50%も増えているという。

また、ある特定の地域に降る雨のことを「集中豪雨」というが、最近では「ゲリラ豪雨」と呼ばれる非常に強い雨が同時多発的に発生し、各地に大きな被害を及ぼしているのだそうだ。温暖化の影響は確実にあるようだ。

「土砂災害警戒情報」に注意しよう。

こうした豪雨への対応として、大切なことは気象庁から発表される事前情報に注意すること。大雨注意報・警報や洪水注意報・警報などはよく耳にするが、大雨による土砂災害が起きそうな場合、気象庁は都道府県と共同で「土砂災害警戒情報」を発表しているという。あまり知られていない情報だが、その該当地域には12時間以内に何らかの土砂災害が起きる危険性があるということだから、自主避難の参考にするためにも普段から気に



しておいた方がよさそうである。警戒情報の発表は気象庁のホームページで調べることができる。

また気象庁では大雨情報を正確に届けるために、「地域単位」であった情報を「市町村単位」で発表する準備を始めているそうだ。早ければ2010年にも移行されるという。「土砂災害警戒情報」についてはすでに「市町村単位」で発表している区域もある。とはいえ、「ゲリラ豪雨」などは余裕をもって避難することができないため、住居地域に警報などが出ていない場合でも、近隣地域に発表されている時には注意すべきだと村山さんは強調した。

「身の安全を確保」、二が「火の元の確認」。

一方地震災害への備えとしては「自分の命を守る」ことが一番重要だ。以前は「火の元を消してから避難」と言われてきたが、今は建物や家具の下敷きにならないことが優先されるようになってきている。火の元の点検はその後に行う。万が一に備えて消火器の使い方もマスターしておきたい。

日頃の注意で重要なことは住まいや勤め先、学校、通勤・通学路などでの「地震による揺れの強弱」を知っておくことだ。家の中で揺れが激しい場所には、耐震補強や家具を固定し転倒防止などの予防策をとる必要がある。水や食料は最低でも3日分を備蓄しておくこと。「特に食料は好きなものを備蓄しましょう。嫌いなものは災害時にはまずノドを通りません」と村山さんは語った。

地震発生直後の対策としては正確な情報を入手して、慌てずに行動することが肝心となる。そのためにも日頃からの避難所や避難経路の確認が重要になってくる。「阪神淡路大震災の発生直後の対応について、神戸地方気象台は『訓練したことはできた』と報告しています。つまり、訓練しなかったことは何もできなかったということです。ですから防災訓練などへ積極的に参加することをお勧めします」

日頃の備えと訓練の必要性を語って、村山さんは講義をしめくくった。



第2部 パネルディスカッション

人それぞれの立場で、大規模災害時の社会貢献はできる。

第2部のパネルディスカッションでは、パネリストとして慶應義塾大学 教授の金子郁容さん、元サッカー日本代表の北澤豪さん、株式会社 東横商事 代表取締役社長の飯島隆史さん、神奈川新聞社 報道部記者の渡辺渉さん、そしてコーディネーターとして元NHKキャスターで千葉商科大学 教授宮崎緑さんが参加し、それぞれの経験をもとに災害への対応策を議論した。

有事の時に対応できる社会の仕組みが果たして作れるか？

金子郁容さんが、「阪神淡路大震災の発生直後に現地を訪れました」と語り始め、まず問題提起を行った。現地では地域の学校へ避難しようとしていた被災者が学校の開放を求めているのが印象的だったという。その後食料は不足していないようだったが、「靴下が足りない」と報道されると、全国から大量の靴下が送られてくる。ここで大事なのは、大規模災害時に対応できる社会の仕組み・決まりがきちんとできているか、現地の情報が正確に伝わっているかということだという。

「大勢のボランティアが活躍しましたが、被災地に行く行かないにかかわらず、一人一人が自分のできることを実

行し、人と人とのつながりを実感することが大切だと考えています」と金子さんは語った。

渡辺渉さんは記者として、2004年の中越地震と2007年の中越沖地震を取材したときの経験を述べた。それによると震度7の地震でも、地盤により家屋倒壊などの被害にはかなりの差があるようだ。避難所では約3000人もの人が生活していたが、水・食料は足りているものの、先行きへの不安が広がっていた。一方で行政などではなく地域の人たちが自主的に開設した避難所もできていた。しかし、果たして大都市で大地震が起きたときに地域住民が連帯してこのような事ができるのかに懸念を感じたそうだ。

パチンコホールが地域の備蓄基地になる。

宮崎みどりさんがそれを受けて「大規模災害時にそれぞれの立場でできることとして、神奈川県内で9つのパチンコホールを経営している東横商事さんは、市民を支援するための非常食や防災用品などの備蓄に取り組んでいるそうですね」と話を振った。

飯島隆史さんは「ええ。きっかけはホールの2階やすぐ近くで暮らす社員が避難所を考えてのことでした」と答えた。大規模災害の時に社員がとにかくホールに集まれば数日間は飲料水が用意されているというわけである。しかしその後、「それだけではもったいないと考え、地域に開放して、両親、子ども、家族、恋人、自分にとって大事な人たちやその仲間の人たちも一緒に連れて来られるようにしよう」とい

う声が上がったそうだ。

備蓄アイテムも増えた。女性のための簡易トイレや赤ちゃん用の粉ミルクと湯沸かし器具などが備えられるようになったという。神奈川県遊協では20年以上にわたって社会貢献活動に取り組んでおり、今後も他のホールも交えて具体的な取り組みを考えていきたいと語った。

スポーツを通じて人を思いやる心を育てる。

その話を聞いた北澤豪さんは「Jリーグのチームでも同じようなことができそうだ」と発言。広いグラウンドは避難場所になるし、クラブハウスを防災用の避難基地するなど、地域とのつながりができるという。

北澤さん自身はこれまで紛争地域の子どもたちのために、現地の小学校へサッカーボールを寄贈するような活動を続けてきた。パレスチナ難民の子どもたちのサッカー大会も開いた。あるゲームで勝ったチームの子どもが、負けたチームの子どもたちに「次はお前らのためにも頑張るから」と声をかけていたのが印象的だったと語る。そこにスポーツを通じた他者への思いやりがあり、目標を持って生きるという力強さを感じたのだ。さらに彼らから受けた「ありがとう」の言葉が、自分を次へ次へと後押ししてくれたという。

いざというときに、助け合う気持ちをスポーツを通じて育むことができると感じた北澤さんはこれからも社会貢献活動を続けていきたいと語った。

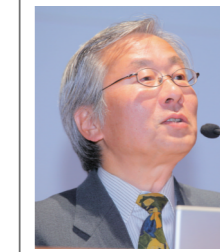
得意の分野や、持てる力は違っても、人それぞれの立場で力を発揮すれば、さまざまな形の社会貢献ができ、大規模災害時の被害の拡大を軽減することができるという事例がフォーラムを通じて明らかになっていった。「そのためにハードウェアもソフトウェアも大切になってきますが、それをつなぐハートウェアが最も大事で、実質的な効果を上げる鍵になると思います。このフォーラムを機に何かが始まるという期待が高まりました。ありがとうございました」

宮崎みどりさんはそのように語り、実りの多いフォーラムは幕を閉じた。

当日来場した方へプレゼントした防災グッズ



第一部出演者プロフィール

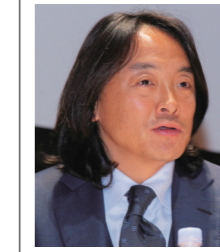


村山 貴司さん (天気予報士)
(財)気象業務支援センター専任主任技師。1949年東京生まれ。72年東京教育大学卒。同年(財)日本気象協会入社。75年からウェザーキャスターとしてテレビ・ラジオに出演。80年よりNHKニュース7をはじめ、NHKの主要なニュース番組のキャスターを歴任。03年、(財)気象業務支援センターに入社。06年まで、NHKニュースおはよう日本やNHK週刊ニュースの気象キャスターを担当。現在は気象と健康、地方環境に関する業務に携わる。

第二部出演者プロフィール



金子 郁容さん (慶應義塾大学 教授)
1948年東京生まれ。慶應義塾大学工学部卒。一橋大学商学部教授等を経て94年より現職。99年から02年まで、慶應義塾幼稚舎舎長兼任。07年より研究科委員長。専門は、情報組織論、ネットワーク論、コミュニティ論。ボランティアな組織原理とコミュニティ・ソリューションの可能性を探る。地域コミュニティが作り運営する学校「コミュニティ・スクール」を提案し、各地でスクールの運営支援をしている。



北澤 豪さん (元サッカー日本代表)
中学時代は読売サッカークラブ・ジュニアユース所属。修徳高校卒業後、本田技研工業入社。海外へのサッカー留学・日本代表初選出を経て、読売クラブ(現東京ヴェルディ1969)へ。日本代表として多数の国際試合で活躍。03年現役引退。また、社会貢献活動にも積極的に取り組み、サッカーを通じて世界の子ども達を支援できる環境作りを目指す。日本サッカー協会国際委員、JICAオフィシャルサポーターとしてサッカーの発展・普及に向けての活動を行っている。



渡辺 渉さん (神奈川新聞社 報道部記者)
1974年、横浜市生まれ。中央大学経済学部卒業。96年神奈川新聞入社。報道部、三浦支局、小田原支局などを経て現在は県警担当。2004年の新潟県中越地震、07年の同県中越沖地震を取材。



飯島 隆史さん (株式会社 東横商事 代表取締役社長)
1960年、横浜市戸塚区生まれ。駒沢大学経済学部卒業。99年(株)東横商事代表取締役役に就任。2008年神奈川県遊技場協同組合副理事長就任。健全な地域社会づくりを目指し、飲料水や非常食、防災用品などの備蓄事業を全店舗にて継続している。



宮崎 緑さん (千葉商科大学 教授)
慶應義塾大学大学院修了。NHK「ニュースセンター9時」初の女性ニュースキャスターに就任したジャーナリストとしての経験をいかし、専門の国際政治学および政策情報学に実学としての体系を導入。千葉商科大学政策情報学部助教授を経て現職。神奈川県教育委員。